UD FONT
見やすいユニバーサルデザイン
フォントを採用しています。

一般財団法人
asics Foundation

ANNUAL REPORT
2025

Sound Mind, Sound Body

すべての人が運動・スポーツを通じて
心身ともに健康な世界の実現を目指して

Our Vision

財団の目指す姿

ASICS Foundationは、
運動・スポーツのアクセシビリティを
向上させることで、
すべての人が運動・スポーツを通じて
心身ともに健康でいられる世界の実現を
目指しています。

Contents

目次

財団の目指す姿 …… 01
イントロダクション
ASICS Foundation　支援の考え方 …… 02
理事長挨拶 …… 03
2025年度 活動実績 …… 04
役員メッセージ …… 08
会計報告 …… 13

Who We Are

一般財団法人ASICS Foundationとは

ASICS Foundationは、株式会社アシックスの「健全な身体に健全な精神があれかし」という創業哲学を受け継ぎ、設立されました。私たちは、特に経済的・社会的に困難な状況にある青少年、障がい者、女性などに対して、運動やスポーツを通じて心身の健康に寄与する活動を支援します。当面、アシックスの事業や生産拠点がある国と地域（ベトナム・インドネシア・インド・カンボジア・日本など）及び、関連のある地域などで助成事業と連携事業を実施します。

受益者ターゲット	助成事業対象地域
青少年	インド・ベトナム・ インドネシア・カンボジア
障がい者	日本
女性	インド

私たちは、今後もさまざまな取り組みを通じて、支援を必要とする方々に寄り添える財団でありつづけたいと思っています。

ASICS Foundation　支援の考え方 What We Believe

ASICS Foundationは、経済的・社会的に困難な状況にある人々にとって、安全で包括的かつ継続的な運動・スポーツへのアクセスは依然として限られていると考えています。
私たちは、この現状を重要な社会課題として捉えており、この課題に対応するため、助成事業と連携事業を通じて支援していきます。

取り組む社会課題

課題

誰もがスポーツや運動の機会にアクセスできているわけではない

影響

- スポーツ文化の未成熟
- 心身の健康の低下
- 社会的つながりの欠如

原因

障がい者
- 地域にスポーツ団体が少ない
- 障がい者スポーツの指導者不足
- 家族の送迎やサポートが必要

青少年
- 構造化されたカリキュラムの不足
- 遊び場やグラウンドの未整備
- 指導者の能力開発機会の不足

女性
- 親や家族の懸念・理解不足
- ロールモデルが少ない
- 文化的風習による社会的差別

価値創造ストーリー

優先課題

経済的・社会的に困難な状況にある人々へのスポーツアクセシビリティの向上

Input

- 助成金
- 理事や専門家の知見
- 国内スポーツ組織との連携

Activity

助成を通じた支援
- スポーツ活動
- コーチの能力開発
- 体験会
- スポーツイベント
- カリキュラム作成
- 啓発活動

Output

障がい者
- 運動実施機会・時間の増加

青少年
- 運動実施機会・時間の増加
- ライフスキルの学習機会の確保

女性
- 運動実施時間の増加
- 女性のエンパワーメント機会の確保

団体と財団のタッチポイント創出
- 活動報告書
- オンラインミーティング

Impact

行動変容・意識変容

障がい者
- 生きがいや希望の創出
- インクルーシブなコミュニティ形成

青少年
- 次世代リーダーの誕生

女性
- ロールモデルの誕生

団体の組織基盤の強化と活動の持続可能性向上

Vision

すべての人が運動・スポーツを通じて心身ともに健康でいられる世界の実現

ASICS Foundationの2つのプログラム

助成事業／Grant Program

現地活動を行うNPOへの支援を通し経済的・社会的困窮者のスポーツ活動に寄与する助成プログラム

当面の優先地域
ベトナム・インドネシア・インド・カンボジア・日本など
助成金額：最大 500万円（2025年度のみ125万円）
支援期間：最大 3年
公募型プログラム

※2025年度は4カ国6団体が採択され、2025年度より活動開始

連携事業／Partnership Program

地域社会にポジティブな変化を促すため、財団と協力し多様な関係者に働きかける連携アクションを推進するプログラム

グローバル
助成金額：最大 1,000万円（2026年度のみ500万円）
支援期間：最大 5年
非公募型プログラム

※2026年度より支援開始予定

理事長挨拶 Message from the Chairperson

より多くの人々に、スポーツの価値を届けるために ──設立１周年を迎えて──

理事長 **甲田 知子** 株式会社アシックス 常務執行役員

ASICS Foundationは、2025年4月に設立され、このたび無事に設立1周年を迎えることができました。これもひとえに、財団の理念に共感いただき、設立にご賛同いただいた皆様、そして活動を支えてくださったすべての方々のお力添えによるものと心より感謝申し上げます。

私たちは、「世界中の人々に運動やスポーツのアクセシビリティを向上させ、心身ともに健康でいられる世界の実現」──このビジョンのもと、歩み始めました。

運動やスポーツには、心と身体の健康を育み、人々に希望と勇気をもたらす力があります。この信念は、株式会社アシックスの創業哲学『健全な身体に健全な精神があれかし(Sound Mind, Sound Body)』を受け継ぐものであり、私たち財団のアイデンティティの根幹をなしています。スポーツの持つ力を信じ、その価値を社会に広めながら、一人でも多くの人がスポーツを通じて健やかで豊かな人生を歩める社会の実現を目指して、取り組んでいます。

設立初年度は手探りの連続でしたが、財団役員・事務局メンバーが思いを一つに議論を重ね、助成先団体との対話を深めながら、4カ国6団体への初めての助成支援を実現することができました。また、当初2027年度からの開始を予定していた連携事業を、1年前倒しで採択することもできました。

運営面においては、2次選考に現地視察とプレゼンテーションのプロセスを取り入れ、支援先団体との早期の信頼関係構築を図りました。また、理事会の審議を通じて選考基準の共有や採択・助成継続の判断を行い、ガバナンスに基づく意思決定の枠組みを整備しました。こうして初年度から着実に歩みを進め、ビジョンの実現に向けた確かな礎を築くことができました。

一方で、初年度の活動を通じて見えてきた課題もあります。スポーツのアクセシビリティを真に向上させるためには、支援の輪をさらに広げるとともに、助成先団体との継続的な関係構築と活動インパクトの可視化が不可欠です。また、財団としての運営体制を強化し、組織基盤をさらに充実させていくことも重要な課題と認識しています。こうした課題を真摯に受け止め、2年目の活動に活かしてまいります。

本レポートでは、初年度の助成活動や運営の詳細をご報告するとともに、各助成先団体の活動の様子をご紹介します。それぞれの現場で生まれた変化や、スポーツが人々にもたらした喜びと希望の声を、ぜひご覧いただければ幸いです。一つひとつの活動の積み重ねが、やがて大きな社会変革へとつながると信じています。

最後に、私たちの活動に関心を寄せてくださった方々、支えてくださったすべてのパートナー、助成先団体、そして関係者の皆様に心より感謝申し上げます。皆様のご支援とご協力があってこそ、ASICS Foundationの歩みは続いています。引き続き、スポーツの持つ力を信じ、一人でも多くの方が運動やスポーツを通じて心身ともに健やかな人生を送れる社会の実現に向け皆様とともに歩んでまいります。

2025年度 活動実績 FY2025 Activity

2025年4月の財団設立後、同年5月より助成事業の公募を開始し、合計76件の申請を受領しました。書類審査、現地視察および応募団体によるプレゼンテーション等を含む約3か月間の選考を経て、4カ国6団体への支援を決定し、総額約600万円の助成金を給付いたしました。

事業運営面においては、助成事業の実施および理事会の開催等を通じ、一般財団法人としての事業基盤を着実に構築いたしました。あわせて、各理事の専門的知見や現地視察で得られた示唆を事業運営に反映することで、当財団が支援すべき対象および方向性などに関する共通認識が形成・深化した一年となりました。

2026年は財団設立2年目の重要な年となります。2025年に認識した課題の改善に取り組むことで、事業運営の質を一層高めるとともに、助成事業等の拡大を通じて社会価値のさらなる創出を実現していきます。

財団設立時の様子
左から、石川理事、甲田理事長、一ノ瀬理事

現地視察の様子（インド）

「Mrida Education and Welfare Society」（インド・青少年）

「ハート・オブ・ゴールド」（カンボジア・青少年）

■ 選考プロセス

一次選考
書類審査

▶

二次選考
現地視察・面談
プレゼンテーション

■ 助成先一覧

地域	団体名	受益者ターゲット	2025年度 助成交付額 ※3か月分のみ	2026年度 助成交付額 ※1年分
日本	NO EXCUSE	障がい者	480,700円	2,487,800円
	琉球スポーツサポート	障がい者	689,100円	1,897,160円
インド	Maitrayana Charity Foundation	女性	1,213,297円	4,814,918円※
	Mrida Education and Welfare Society	青少年	1,224,452円	4,334,065円※
カンボジア	ハート・オブ・ゴールド	青少年	1,250,000円	5,000,000円
インドネシア	Perkumpulan Rumah Cemara	青少年	1,255,095円	4,959,822円※

※現地通貨を理事会時の日本円に換算

助成事業

日本 一般社団法人 NO EXCUSE

プログラム名	車いすバスケ： ジュニア育成Bridgeプログラム
受益者ターゲット	障がい者
地域	東京都
スポーツ種目	車いすバスケットボール
助成期間	2025年～2028年

組織概要

車いすバスケットボールを通じて自己決定・自己選択できる社会を目指す団体。トップチームは大会での好成績と優秀な選手を輩出。近年ではジュニア世代の選手育成やコーチ育成にも注力し、外部有識者との連携や海外コーチからのメンタリングやプログラム協力により、多様な取り組みを実施。

プログラム概要

本プログラムは2022年よりパイロット事業で体力測定、食事調査、保護者会等を実施し課題を特定。障がいのある子どもに継続的なスポーツ環境が不足していること、特に同年代と切磋琢磨する機会やセルフケア情報が乏しいという課題に取り組むため、小学5年生～高校生を対象に月6回のNExtセッション（ジュニア向け車いすバスケ）や合宿、専門家と連携したケアの指導を実施し、次世代選手の育成と将来的なトップチームへの昇格を目指す。

助成先の声

ジュニア育成Bridgeプログラムでは、障がいのある若い世代が車いすバスケットボールを通じて自己決定・自己選択できる社会の実現を目指しています。参加者からは「現役日本代表選手がコーチをしてくれるだけでもすごい。自分たちも応えたい」、保護者からも「部活動のように定期的に成長できる場がある」と、まさに部活動のように同世代と切磋琢磨する場があります。

日本 一般社団法人 琉球スポーツサポート

プログラム名	障がい者の スポーツ活動の活性化と ノーマライゼーションの実現
受益者ターゲット	障がい者
地域	沖縄県
スポーツ種目	多種目（卓球・陸上・バドミントン・ボッチャ・フロアボール等）
助成期間	2025年～2026年

組織概要

沖縄で障がい当事者中心の総合型スポーツクラブを運営。卓球・陸上など12クラブで約80名が活動、10年以上の実績を持つ。外部スポーツ統括団体や大学と連携し、有資格者のコーチを確保することで障がいの程度・特性に応じた指導方法と福祉支援事業連携のモデルを構築している。

プログラム概要

沖縄では障がい当事者が継続的にスポーツを行う場や指導者が不足し、高頻度での活動ニーズに応えられていない。本プログラムは居場所づくりとQOL向上、相互理解促進を目指し、地域クラブへの登録と継続参加基盤を構築するため、障がい者スポーツ体験会（卓球・陸上・バドミントン・ボッチャ・フロアボール）とMixスポーツ教室を開催し、誰でも継続的に参加できる運動プログラムを提供する。

助成先の声

沖縄県内での障がい者スポーツへのニーズは確実に高まっています。元トップアスリートの評議員や理事の方々にご視察いただいた際、参加者からは「ASICS Foundationに応援されているって凄い！」「このクラブに参加できて嬉しい」との声が上がり、参加者の意欲はもちろん、クラブのブランド価値向上にもつながりました。今後も障がい当事者のスポーツ活動を充実させ、ノーマライゼーションの実現を目指します。

助成事業

インド Maitrayana Charity Foundation

プログラム名	Young People's Initiative
受益者ターゲット	女性
地域	南東デリー
スポーツ種目	ネットボール
助成期間	2025年～2028年

組織概要

インドの都市部スラム街で「スポーツ・フォー・デベロップメント」モデルを採用し、少女・若年女性を対象にネットボール中心のプログラムを展開。スポーツとライフスキル教育を統合し、ジェンダー不平等に直面する社会的に疎外された少女たちの自信、リーダーシップ、精神的回復力を育成し、心身の健康向上を目指す。

プログラム概要

デリー南東部の移民コミュニティでは、家父長制により少女が移動制限や早婚圧力を受け、安全な遊び場やスポーツ指導が不足し、少女の心身の健康や自己肯定感が損なわれている。本プログラムは継続的なネットボールとライフスキルのセッションを通じて少女の心身の健康を高め、安全でインクルーシブな空間でリーダーシップとライフスキルを育成し、公共の場で権利を擁護できる力を育むことを目的とする。

助成先の声

本プロジェクトを通じて、プログラムを必要とする少女たちへの学校における長期的・継続的な関わりが実現しています。「ライフスキルプログラムでリーダーシップを身につけ、奉仕活動への準備が整いました」という10代の参加者の声や、「キャンプ参加後、娘の活力と心身の健康に著しい変化・効果が見られる」という保護者からの声も寄せられています。

インド Mrida Education and Welfare Society

プログラム名	Building Communities around Football in the Tribal Heartland
受益者ターゲット	青少年
地域	マンドラ （マディヤプラデーシュ州）
スポーツ種目	サッカー
助成期間	2025年～2028年

組織概要

インドの部族地域で第一世代学習者（ゴンド族、バイガ族、アヒル族等）に寄宿制学校教育とスポーツプログラムを提供。70以上の村で地域最大級のコミュニティフットボールリーグを運営し、男女混合チームでサッカーを通じた規律、回復力、リーダーシップを育成。地域で第一学習者である若者世代を、初めてリーダーとなる世代へと育成し、教育とスポーツ機会へのアクセス確保により貧困撲滅を目指す。

プログラム概要

マディヤプラデーシュ州東部の部族地域では、慢性的貧困や教育格差により子どもの遊びや学びの機会が乏しく、女子は移動制限でスポーツ参加が困難な状況にある。プログラムはジェンダーインクルーシブなサッカーリーグを4ヶ月間開催し、月経衛生ワークショップや地域コーチ育成を実施する。これにより、若者の体力・認知的集中力・情緒の安定化に寄与することや、ジェンダーインクルーシブな環境の構築、地域でのコーチ育成によるコミュニティ主導の開発を目指す。

助成先の声

本支援を通じて、先住民族のコミュニティ内の子どもたちを対象としたスポーツによるコミュニティ形成の取り組みが実現しました。保護者からは「娘が練習を心待ちにし、コーチへの信頼と確信を持っています」、コーチ陣からも「子どもたちに規律と仲間との連携が育まれています」との声が寄せられています。この経験を礎に、より多くの子どもたちへのスポーツ機会の拡充を目指します。

助成事業

カンボジア 特定非営利活動法人 ハート・オブ・ゴールド

プログラム名	カンボジア体育 インクルーシブ体育主流化 プロジェクト
受益者ターゲット	青少年
地域	プノンペン都、 スヴァイリエン州
スポーツ種目	体育
助成期間	2025年～2028年

組織概要

途上国・被災地・紛争地の人々や子どもたちの自立を支援。2006年からカンボジア教育省と協働し、「知識・技能・態度」を学べる体育科教育を普及。学習指導要領作成、教員養成、国立研究所支援等を実施し、現在1,358校に展開。性差・障がい・民族を超えた全青少年へのインクルーシブな体育教育環境構築と全国への持続可能な普及体制確立を目指す。

プログラム概要

カンボジアでは2006年まで体育として簡易なクメール体操が行われ、現在、体育教育は普及しつつあるも、性差や障がい、少数民族に配慮した授業や、僻地での授業実施に課題が残っている。本プログラムは、全ての青少年が学べるインクルーシブ体育の基本方針とガイドラインを策定し、教員研修や教材開発、普及計画を通じて全国展開を目指す。

助成先の声

カンボジア全土の体育教員が活用できる「インクルーシブ体育」のガイドライン作成を目指しています。本プロジェクトを通じて、教員は障がい・宗教・性別を問わず多様な生徒への指導を学び、生徒はお互いを尊重しながら協力して授業に取り組む力を育みます。すべての子どもたちがスポーツを「する・見る・支える」ことを楽しめる体育を、カンボジア全土に広げていきたいと考えています。

インドネシア Perkumpulan Rumah Cemara

プログラム名	FIT Youth: Youth Leading Change on and off the Field
受益者ターゲット	青少年
地域	バンドン（西ジャワ州）
スポーツ種目	ストリートサッカー
助成期間	2025年～2028年

組織概要

HIV感染者や薬物使用者などインドネシアの社会的弱者を20年以上支援。2007年からスポーツを偏見軽減の手段として活用し、2011年よりホームレス・ワールドカップの国内運営団体としても活動。現在はバンドンで若者をコーチ育成し、子どもたちにストリートサッカーを通じた包括的支援を提供し偏見や差別のない平等な社会実現を目指す。

プログラム概要

バンドンでは人口の約25%が非公式居住地に住み、子どもは貧困や暴力、薬物曝露など深刻な課題に直面する傾向にある。また若者の失業率は国内最高で、70%以上の若者がスポーツに参加できていない。プログラムはストリートサッカーを通じ、弱者の若者をコミュニティコーチとして育成し、安全な遊び場とライフスキルを提供することで若者が継続的にスポーツに参加し、地域が自立的に活動を続けるモデル構築を目指す。

助成先の声

財団のご支援により、包摂性・ウェルビーイング・セーフガーディングを柱としたスポーツを通じた若者の能力開発の基盤が確立されました。若きリーダーたちが地域の子どもたちのために安全で有意義なスポーツ活動を届けるスキルと自信を身につけ、参加者からは「興味深く意義深い内容で、新鮮な学びを存分に楽しめた」、「地域社会の課題と解決策について理解が深まった」との声も届いています。

Messages From Our Board

役員メッセージ

- Board of Directors Roundtable Discussion
  理事座談会
- Board Members
  役員

設立1年目を終えて

理事座談会

誰もがスポーツへアクセスできる社会の実現へ 本気で挑めると確信した、はじまりの年

ASICS Foundation設立から1年が経ちました。理事長と理事がこの1年の重みを振り返りながら、成果と課題、そして今後の活動への思いを語ります。

理事
花形 照美
Terumi Hanagata

理事長
甲田 知子
Tomoko Koda

理事
岐部 智恵子
Chieko Kibe

理事
神 一世子
Iyoko Jin

※プロフィールは2026年4月現在のものです。

設立1年を振り返って

甲田：アシックスが財団を設立するのは初めてだったので、すべてが手探りで、本当に大変なスタートでした。その中で大きな支えになったのは、財団活動に対する強い思いを持ったメンバーと取り組めたことです。活発で深い議論を重ねることができ、1年目として良いスタートが切れたと感じています。

岐部：普段は接することができない方々と関わることができ、貴重な経験でした。アシックスの廣田会長や甲田理事長などのさまざまな思いがあって、財団を設立したと思いますが、その思いが一つになり、財団の力になっていると感じます。今では、頼もしいメンバーであると同時に、大切な仲間です。

神：これまで知らなかったさまざまな地域や団体の活動に触れ、助成事業の手応えと今後の可能性を感じた1年でした。また、メンバーそれぞれが異なるバックグラウンドを持っているため、学びの多い環境でもありました。

花形：私も率直に言って大変だったというのが第一印象です。設立後すぐに助成事業の公募を開始し、多くの申請が集まったことにまず驚きましたし、限られた時間で選考を進めていくスピード感や、財団内での連携の良さも印象的でした。理事会が女性のみという点も特徴的だと思いますが、当初から意図されていたのでしょうか。

甲田：結果的に女性のみになったというのが正直なところ。財団設立が決まった際、アシックスで共生社会の実現に向けて、さまざまな方と関わっていました。その中で「この人と一緒に活動したい」と思い浮かんだ方々に声をかけたところ、たまたま全員が女性でした。ただ、海外では女性がスポーツに参加できないケースもあるため、理事会が女性だけであること自体が、そうした課題へのメッセージとなり、財団のユニークさにつながっているとも感じます。もちろん性別にこだわりはなく、今後もバックグラウンドや思いを重視してメンバーを集めていきたいです。

助成先の選定について

甲田：一般的に、財団では事務局が専門家による選考委員会を設けて審査を行い、その結果をもとに理事会で決定するケースが多いと思います。ただ、ASICS Foundationではあえて選考委員会を設けていません。理事それぞれのバックグラウンドや視点を活かすためにも、選考の段階から関わらないと良さが出ないので、書類審査での絞り込みから入ってもらっています。負担は大きいですが、その分、納得感のある意思決定につながっていると思います。

花形：選考委員会がない点も特徴的ですが、助成先を決定する前に、現地視察を行っているのも珍しいですよね。書類である程度の見込みを立てているとはいえ、限られた期間の中で、インドやカンボジアなど、国内外の現場に足を運んだのは、印象的でした。ただ、そうした視察を実施した中で、日本では当たり前の体育の授業が、カンボジアでは必ずしもそうではないという現実に触れ、よく考えれば分かることでも、知らなかったことが多いと実感しました。

甲田：視察に加えて、オンライン面談も実施しており、相手の顔を見ながら直接対話しています。納得したうえで判断したいので、資料だけでは分からない本人の言葉や思いを聞くことを大切にしています。オンラインであっても話す機会を設けたことは、非常に有意義でした。

この1年の支援で、印象的だった出来事

神：インドネシアのストリートサッカーを種目とする「Rumah Cemara」という団体を助成するにあたって、現場を訪れたときの出来事が印象に残っています。多くの子どもたちが、学校終わりの放課後に集まり、楽しそうにプレーしていました。コーチも、その地域の出身で、貧困や暴力、薬物といった課題を抱える中で活動されています。現地に足を運び、子どもたちと触れ合いながら、こうした取り組みを直接知れたことが、最も心に残る体験でした。

岐部：数字では表れにくい部分ではありますが、活動の広がりを強く感じます。「琉球スポーツサポート」の助成では、ASICS Foundationからの支援に対して非常に喜んでいただきましたし、県や市から見学に訪れる方も増えていると聞いています。地域の中での影響が広がり、どんどん大きくなっていく可能性を感じました。

花形：沖縄初のモデルとして全国に発信していくという目標も印象的でしたよね。私は車いすバスケットボールの「NO EXCUSE」という団体の現場を訪れ、環境づくりの難しさを強く実感しました。競技を成立させるために、競技用車いすの運搬や、対戦相手の確保など、ハードルは多いです。短時間ではありましたが、現地で得た気づきは非常に大きな学びとなりました。

甲田：インド都市部のスラム街で、少女たちへスポーツを教える団体「Maitrayana」の視察へ行ったときのことです。活動の最後にバナナを一人に一本配るのですが、彼女たちは口をつけない。理由を聞くと、持ち帰って兄弟たちと分け合っているというのです。そういった状況なので、現地の指導員は「まずは、あなた一人で食べなさい」と伝えています。兄弟たちに渡しても、今の飢えをしのぐだけになってしまうから、まずはあなたが強くなって成長しなさいと。そうすれば家族や、将来、他の女の子たちも助けられるようになると。この出来事を通じて、一人を支えることの意味の大きさを感じました。

岐部：財団の活動において、数値的な目標を達成することはもちろん、一人ひとりと心が触れ合うことで、支援がその人のこれからの

人生に影響を与えることを実感しています。だからこそ、数字には表れない寄り添う支援も大切です。

甲田：先ほどの女の子も、自分が受けた恩は次の誰かへと渡そうとすると思う。量も大切ですが、それと同時に、一人ひとりの心にしっかり届く、質の高い支援も、財団として大事にしていきたいです。

活動を通して感じた社会的な意義

岐部：海外の貧困層の子どもたちは学校に通えずに、居場所を求めて非行や薬物に関わる環境に身を置いてしまうことがあります。そうした中で、スポーツを通じて健全な居場所をつくることは、心身の両面において非常に意義があります。

甲田：貧困などの環境に置かれた中で仲間をつくる難しさは、海外だけでなく、日本の障がいのある子どもたちにも同じで、横のつながりを築くことは簡単ではありません。しかし、多くの場合、スポーツはコミュニティの中で行われるため、自然に人とのつながりや居場所を生み出すことができます。

神：スポーツがもたらす障がい者同士のつながりは、大切ですよね。ただ、障がい者スポーツは地域による格差が大きく、団体の規模や基盤もさまざまなのが現状です。障がいの種類も多岐にわたる中で、どのように財団の支援を通じて課題解決につなげていくかは簡単ではありませんが、少しずつでも手が届くように取り組んでいきたいです。

花形：私自身、財団に関わる前はこうした課題があることを知りませんでした。多くの方は、私と同じように日常的に触れる機会が少ないから知らないと思います。だからこそ、さまざまな視点から取り上げ、発信していくこと自体にも社会的な意義は大きい。

甲田：国内の助成先の多くは、大きな団体ではなく、小さなコミュニティが中心です。もっと小さい団体への支援も広げていきたいと考えていますが、どこに支援が必要なのかを見極めていかなければなりません。経済的・社会的に困窮している人々を支えるというのは絶対の基準として、アシックスの事業では手の届きにくい領域を、ASICS Foundationとして支えていくという軸は、今後も変わることはありません。

財団の課題

甲田：現時点では助成先が6団体にとどまっており、今後は支援先の拡大が課題になります。

花形：今は助成先が多くないので、支援先について十分に議論できていますが、数が増えると同じようにはいかないでしょう。支援先を拡大しながらも、効率化する部分と時間をかける部分を見極め、議論の充実度は担保する必要がありますね。

岐部：そのためにも、助成を続けることで蓄積されていくナレッジは、有効に活かすことが望まれます。他の助成活動にも展開したり、モデルとして活用したりすることで、社会へのインパクトも広げられるはず。ナレッジのノウハウ化、共有化は、今後の重要課題の一つと言えるでしょう。

花形：助成は3年間という長期間で行っているため、その間に得られる知見は多いですね。ただ、3年間にわたり、支援先とどのように伴走していくのか、しっかりと考え、意義を見出す必要があります。

甲田：1年目は、まだ助成もしていない段階での広報は控えた方がいいと思い、広報も限定的に行いました。しかし、今後は、3年間の助成を通じて生まれる成果をしっかりと社会に発信していくことも大事です。支援先にとっても社会にとっても、価値のあるインパクトにつながるよう、発信のあり方も含めて取り組んでいきたい。

今後の活動

甲田：社会課題を解決し、社会的インパクトを創出することが財団の目的であるため、今後はその成果を着実に積み上げていくことが重要です。その成果を、手が届きにくい場所へと広げていきたい。新しくアフリカでの連携事業を行うことが決まっており、また海外だけでなく、日本国内でも支援が行き届いていない箇所が多くある中で、財団として関わる意義は大きいです。

神：価値のある活動を行っているにもかかわらず、発展につながりにくい団体に支援が届くとよいですね。また、数値では捉えにくい成

果にも目を向け、そうした価値もすくい上げていく必要があります。

花形：助成に至らなかった団体に対しても、これまでに蓄積してきたノウハウや知見を共有することで、別の形で支援ができる可能性がありますね。

甲田：やりたいことが次々と出てきますが、まずは毎年一つずつでも新しい取り組みを実現していきたい。例えば、アシックスにはパラスポーツ指導員が約30名在籍しており、そうした人材が財団の活動に関われる仕組みづくりも進めたいと考えています。

花形：パラスポーツ指導員の資格を持つ社員が、財団の活動に関わることによって組織の理念や活動への理解が深まり、より豊かな経験を得られることを期待しています。

甲田：アシックスの契約アスリートの中にも財団の活動に興味を持ち、参加したいという声が上がっています。障がいのある方がパラアスリートとの交流を通じて、パラスポーツに取り組むようになるケースもあります。そうしたつながりを広げていくことも、今後の重要な取り組みの一つです。

スポーツを通して支援する意義

甲田：スポーツや運動が心と体を健康にすることは、科学的にも実証されています。財団のミッションは、国内外を問わず、経済的・社会的に困窮している方々にスポーツの機会を届けることです。これはアシックスの創業理念にも通じる考えであり、財団として着実に実現していきます。

花形：スポーツは、若い世代の成長や、女性の自信の醸成にもつながる力を持っています。日本では、まだ運動の可能性が十分に知られていないと感じます。だからこそ、疲れがちな現代の日本人に対しても、スポーツが持つ新たな価値を提案できるのではないでしょうか。

甲田：スポーツが持つ可能性も、さらに広げていきたいですね。誰もがスポーツにアクセスできる環境の実現を、本気で作れるメンバーであることを、この1年で実感しました。これからも団結して、さらなる飛躍を遂げたいと思います。

役員 Board Members

甲田 知子
理事長
株式会社アシックス
常務執行役員

和泉 絵里子
評議員
株式会社アシックス
執行役員 法務部長 兼
サステナビリティ部長

岸田 奈美
評議員
作家

増田 明美
評議員
スポーツジャーナリスト、
大阪芸術大学教授

石川 佳純
理事
元プロ卓球選手

一ノ瀬 メイ
理事
競泳パラリンピアン、
現モデル、講演家

岐部 智恵子
理事
桐蔭横浜大学 現代教養学
環心理学コース 教授

神 一世子
理事
一般社団法人パラSC
エスペランサ代表理事

花形 照美
理事
株式会社リクルート
ホールディングス
財団・アートセンター
推進部部長

工藤 陽子
監事
ソフトバンク株式会社
社外監査役、JOC・東京
2025世界陸上財団監事

鈴木 萌
監事
株式会社アシックス
経理部経理チーム
マネジャー

長谷川 雅代
事務局長
株式会社アシックス

会計報告 Financial Report

貸借対照表（要旨） 2025年12月31日現在 （単位：円）

科目			2025年度
資産の部	流動資産	現金預金	25,085,442
		未収入金	16,448
		前払費用	11,876,314
		合計	36,978,204
	固定資産	信託受益権	7,000,000
		合計	7,000,000
資産合計			43,978,204
負債の部	流動負債	未払費用	4,688,688
		未払法人税等	16,500
		預り源泉税	1,393
		合計	4,706,581
	負債合計		4,706,581
正味財産の部	一般正味財産	合計	39,271,623
負債及び正味財産合計			43,978,204

正味財産増減計算書（要旨） 2025年4月1日から2025年12月31日まで （単位：円）

科目			2025年度
一般正味財産増減の部	経常収益	受取寄附金	85,859,885
		雑収入	14,223
		合計	85,874,108
	経常費用	事業費	38,284,972
		管理費	18,301,013
		合計	56,585,985
	当期経常増減額		29,288,123
	当期経常外増減額		10,000,000
	当期一般正味財産増減額		39,271,623
	一般正味財産期首残高		0
	一般正味財産期末残高		39,271,623
正味財産期末残高			39,271,623

財団概要

組織概要

財団名	一般財団法人ASICS Foundation
設立日	2025年4月1日
所在地	神戸市中央区三宮町1－2－4　大和神戸ビル （東京オフィス）東京都千代田区丸の内2－7－2　JPタワー

役員

理事長	甲田 知子（株式会社アシックス 常務執行役員）
評議員	和泉 絵里子（株式会社アシックス 執行役員 法務部長 兼 サステナビリティ部長） 岸田 奈美（作家） 増田 明美（スポーツジャーナリスト、大阪芸術大学教授）
理事	石川 佳純（元プロ卓球選手） 一ノ瀬 メイ（競泳パラリンピアン、現モデル、講演家） 岐部 智恵子（桐蔭横浜大学 現代教養学環心理学コース 教授） 神 一世子（一般社団法人パラSCエスペランサ代表理事） 花形 照美（株式会社リクルートホールディングス 財団・アートセンター推進部部長）
監事	工藤 陽子（ソフトバンク株式会社社外監査役、JOC・東京2025世界陸上財団監事） 鈴木 萌（株式会社アシックス 経理部経理チーム マネジャー）
事務局長	長谷川 雅代（株式会社アシックス）

一般財団法人 ASICS Foundation